

## 国際援助における「地域性」の問題

### The Problems of Regionalism in the International Assistance

細 田 亜津子  
Atsuko HOSODA

#### 要 旨

インドネシア・南スラウェシ州タナ・トラジャ県において、伝統的家屋＝トンコナンの修復保存事業を行った。文化・習慣・社会背景が違う文化財保存の国際援助はそれらの理解、学習の繰り返しである。援助する側、援助される側はそれぞれの主張をする。地域性は独自性を自主的に発揮する場合は、事業を成功させる。しかし、地域性の押し付けは、文化的強制となり、援助展開をスケールの小さいものにしてしまう。本来は、一地方から起こった支援活動は国際援助として十分評価、活用、展開できるのである。

#### キーワード

文化財保存修復事業、国際援助、援助する側・される側、地域性

#### はじめに

本稿は、インドネシア、南スラウェシ州タナ・トラジャ県において行った伝統的家屋＝トンコナンの修復保存で問題になった点を明確にし、文化財保存の国際援助に寄与する方法を考えることである。タナ・トラジャ県において修復が終了した伝統的家屋＝トンコナンは5棟、米倉＝アランは2棟である。その他2棟は、本活動中に終了できなかった。

主な論点は二つある。一つは、タナ・トラジャ県における文化財にたいする認識と、これを保存する考え方の違いからくる時間と交流の蓄積の大切さである。一方、この修復作業の様々な側面に現出する地域中心主義の問題を考え、これを批判・評価することで、日本の一地方が文化財保存をとおして国際援助の可能性があるかどうかを考えるものである。

#### 第1章 修復保存の経緯

先行する修復事業については(財)文化財建造物保存技術協会より報告書がある<sup>1)</sup>。

(財)文化財建造物保存技術協会の修復事業終了

後、1993年～1998年まで県内のトンコナンの残存状況、形態の違い、修復する物件決定までの調査を独自に行った。また、トンコナンの特殊性を確認するため、トラジャ県西方ボレワリママサ県のママサ地域まで調査対象を広げた。この間、調査したトンコナンについては県庁にて県知事への報告を行うとともに県として協力するよう要請してきた。これにより、調査地における調査協力が得られた。また、県内で文化財の調査をしていることが知れ渡り、情報を積極的に提供してくれる者も現れ、調査は年毎にスムーズに出来るようになった<sup>2)</sup>。

##### 1—1 調査結果

調査はボンガカラディン郡を抜かし、ほぼ全県を網羅した。調査結果は、次のようにまとめられる。この調査結果にもとづいて修復物件を決定した。

- ① トンコナン建築には地域差があり、それは、地域の植生に依存している。つまり、地域の植生をいかした建築部材を使用した建物の地域的まとまりがある。

- ② メンケンデック、シラナンを中心とする県南部は、屋根葺き部材は竹材である。シラナン地域は比較的トンコナンが現存する。県南部は、道路整備が進み道路沿いはトンコナンの数が減少、簡易洋式の住居が増えた。
- ③ 県央部である、行政の中心地マカレ、商業の中心地ランテパオは観光客の宿泊が集中することもあり、ホテルやレストラン建設に伴い洋式建築が増加した。一方、マカレ、ランテパオ周辺に位置するサンガラ、サンガラング、サダンを中心とする地域は、トンコナンを多く残している。この県央地域の屋根葺き部材は竹材である。
- ④ バルuppを中心とする県北部は、県央より遠距離にあり、トンコナンを残している。この地域は、県南部・県央部より建物が大きいのが特徴である。また、屋根葺き材は板材である<sup>3)</sup>。
- ⑤ ビトゥアンを中心とする県西部は県北部と同じ県央よりも遠いためトンコナンを残していた。建物は大きく、屋根葺き部材は県北部と同じ板材である<sup>4)</sup>。
- ⑥ 波型鉄板＝トタン葺きが増加している。
- ⑦ 一部地域により洋式建築が増加傾向にあるが、県内では、トンコナン自体を残す努力をしている。屋根葺き材がトタン材にしても、建物全体を壊してしまうのではなく、トンコナン建築方法を踏襲しつつ葺き材だけを替えている傾向がある。
- ⑧ トラジャ人は、トンコナンを儀式の場、家族の団結の象徴として考えており、将来もトンコナンを建て、修復し、保存維持する意思が強くある。
- ⑨ 新築をする場合、例え、トンコナンの伝統的建築方式を100%踏襲せずとも、近代的デザインを取り入れたトンコナン建築を行っている<sup>5)</sup>。
- ⑩ 葺き材が石材のトンコナンは県西部サルプチに1棟現存する。この修理は未完である。

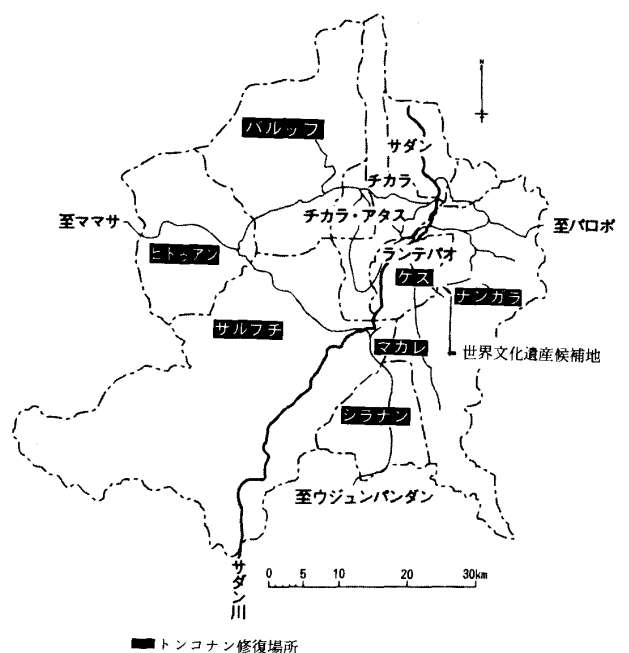
る。

このように修復は、資金の許すかぎり行っていた。また、調査結果から、地域分布を考慮しながら修復物件を決定する方法がいいと考えるに至った。また、調査では、県内の各地域にいる大工に、修復金額を聞くことを第一とした。トンコナンを所有するファミリーに聞くと、必ず高額を回答するからである。なるべく多くの人の意見を聞くこと、技術的に信頼できる大工に率直に意見を聞くことが修復のよしあしを決めるものである。このような調査を継続したことで、建物の大きさ、部材、彫刻、建物の立っている地形などを考慮しても妥当な金額が全県的に理解できるようになった。

## 1-2 日本での組織化

調査と平行して組織作りと修復をおこなう資金調達を行わなければならなかった。もちろん、トラジャ県の修復事業として実施するのが最良である。しかし、県は県外からの「修復事業への協力をする」という範囲であり、県独自の予算を立てるまでに至らなかった。

1995年岩手県前沢町は前沢牛で地域の活性化をはかるべく、「牛と人との共存を探り、生命、



タナトラジャ県地図

自然、人間を知る」というキャッチフレーズで、牛の専門博物館として「牛の博物館」をオープンした。博物館内でのトンコナン縮小複製展示のためトラジャの大工達の来日、それに続き、「インドネシア・サダントラジャ展」を開催し、牛の博物館は、トラジャ県との関係を深めていた<sup>6)</sup>。

このトラジャ大工達、トラジャ展でのトラジャ舞踊団の来日は地域の国際交流の気運を高めていった。これら一連の流れのなかでトラジャ県でのトンコナンの屋根の葺き替えを援助することは、文化交流の一つであるということに進展した。しかし、前沢町がこの交流を支援することを承認したのではなかった。町の事業としては行わないという方針をだした<sup>7)</sup>。

従って、活動は NGO として展開していくことにした。牛の博物館は町立の博物館であり、そこに NGO の事務局を置くことはできない。そこで、事務局を牛の博物館友の会においた。トラジャ県で修復を行う主体は、トンコナン修復支援活動委員会として発足した（以下、支援委員会）。

この活動は、前沢町にトラジャ人が来日し、交流が契機となったものの、町の事業ではないので、広く、全国に活動を呼びかける必要があった。前沢町では、「なぜ、前沢の文化財修復をしないで、トラジャなのか」という意見が多く出た<sup>8)</sup>。つまり、地元を援助しないで、なぜ海外なのかという地方独特の意見であった。何度も討議を重ね、国際文化交流の一つとして実施し、それが、地元の文化財を見直す契機となり、地元の文化財を考えることが最終目的であるとした。

修復は、屋根の修復をする事とし、建物全体を修復するかのようなあいまいさを省くことにした（以下、「屋根」を省き修復のみとする）。これは、トラジャ人にとって、修復は屋根が最も重視するものであり、屋根の修復をすることで、建物全体は約50年以上維持できるからである。2000年までに5棟という数値目標を設定し

た。

このように目的を明確にして、支援委員会は、広報活動、募金活動を開始した。まず、パンフレットを作成し、支援金を募った。フォーラムでの募金、テレホンカード販売による募金を始めた。(株)大成建設の自然・歴史環境基金に応募し180万円の助成金を受けた。

トンコナン修復の費用は、96年度、トラジャでの協議では1棟約80万円だった。そこで、諸経費を加算して、1棟約100万円とした。しかし、支援活動を開始した98年インドネシアは経済危機におちいり、ルピアの下落が続いた。この影響で、1棟分の100万円で、約5棟の修復が可能になった。すぐに99年度の事業として実施した。

この後、3棟のトンコナンを追加修復計画した。このうち、1棟は完成したが、2棟は未完になっている。また、初めに来日した大工達の出身地での修復を前沢町民が強く望み、結局、修復一部金として寄付をした。

### 1-3 トラジャでの組織化

トラジャでの組織化は、次の点に重点を置いて行った。

#### ① 県・行政とのタイアップ

民間の支援活動は、行政サイドと協力することを善しとしない傾向があるが、トラジャでの活動は、行政との協力があって成立した。トラジャ族のような特殊な文化を持ち、特殊な建築技術を維持している場合は、まずそこに住む人が一番の知識の保持者であることを忘れてはならない。行政は、この地域の情報をトータルに把握しており、情報量が非常に多い。この情報は必要不可欠であり、この情報をうまく利用しなければ活動はできない。

この情報を得るために、使用した費用は必要経費として計上した。また、支援活動の内容、計画、資金、範囲、期間などこれらの情報を行政に説明することが必要であ

る。県では日本からの支援活動に真摯に対応する場合もあるが、そうでない場合もある。しかし、県・行政の対応に一度であきらめてはならない。何度でも足を運び、説明し、理解を求め協力を得るような努力をすべきである。

山岳地域での調査や活動では、村長＝ケパラ・デサの役割を無視してはならない。村長は村内の状況を把握し、把握する義務があり、様々なことで協力してくれる県の出先機関である。県よりも具体的な活動の諸側面での協力を依頼できる。また、村長は県および県知事への報告も欠かさず、活動状況を県へ伝えるための人的機関である。行政サイドは村の詳細については知らないが村長は把握している。従って、ある村で、村民に信頼されるためにも村長に不信任感を抱かせないことである。

## ② 文化財関係者

その地域の文化財に知識があり、修復保存に意欲的な人物とネットワークを築くことが必要である。トラジャ族の建物は日本の国立民族博物館にも常設展示されている<sup>9)</sup>。このため、建築関係は、県央のサンガラング郡ケテケス村、世界文化遺産候補地に住むサロンガロ氏を中心にネットワークを作ることができた。しかし、サロンガロ氏といえども全県を理解しているわけではない。したがって、サロンガロ氏の文化財に対する知識を生かせるようなネットワークを組み立てる必要もあった。サロンガロ氏を技術部門の窓口にして各地域と結びつけたのである。各地域には大工、棟梁、彫刻師がいる。地域のプライドや技術の違いがもとで大工達とサロンガロ氏が反目を起こさないためにも、窓口としての役割を担ってもらう必要があった。

## ③ 経理担当者

日本からの送金、運営資金の当事者への支払いをどうするかは大きな問題である。

信頼関係もさることながら、経理の知識があり、日本との連絡を十分にできる人物を得ることは重要な課題だった。また、技術部門と経理部門ときちんと分けて相互に信頼・監視する必要があると考えた。役割分担することで、トラジャ人にとっては多額の資金を一人に集中することの危険回避を行った。こうして経理担当のタンゲサル氏を加えて技術部門、事務部門の分担をしながらトラジャでのトンコナン修復支援活動委員会トラジャ代表として体制を整えた。

### 1-4 伝統社会の交渉と契約の方法

トラジャでの契約は、まず、事前調査を十分に行ったうえで、修復対象物件の所有者であるファミリーと交渉を始める。トラジャの家族は非常に広い家系末端まで含める。現在、修復対象であるトンコナンに居住している家族であっても、ファミリーの代表とは限らず、交渉権がない場合もある。その場合は、交渉権をもつ、ファミリーの代表が住む町部まで行き別に交渉をしなければならない。また、ファミリーの代表が県外に住んでいる場合は、連絡をとり、こちらの意向を説明し、回答を待たねばならない。このような交渉を粘り強く行わねばならない。

ファミリーとの交渉は、ケパラ・デサ（村長）、ケパラ・ドゥスン（集落長）、時にはチャマット（郡長）が同席して行われる。この場合、同席者が時間を守らず、交渉が始まった場合、後から参加した同席者に対して、同じ説明を繰り返さねばならない。支援委員会は、事前に現地代表者と契約書（案）を作成したので、これを見せながら説明した。これは有効的であった。この契約書に基づいて、技術的問題、期間など細かい詰めを行い双方了解のもとで契約書の削除・変更をした。その後、修復金額の詰めにはいる。ファミリーの代表と支援委員会ではかなりの金額差が生じる。この場合、事前調査の報告を細かく行い、支援委員会が調査のもと

づいて話し合いに望んでいることをみせなければならぬ。

第一回目の交渉は、このようにして終わる。この後、交渉は二三度行う。対象物件のファミリーは、独自に話しあい続けるのである。修復金額は、ほぼ事前調査時の金額に落ち着くことが多かった。しかし、援助する日本側は事前調査の金額に固執するばかりではなく、物価の高騰などを考慮した柔軟な対応をしていく必要がある。

こうして、金額、作業開始日などが決まると双方立会いで契約する。契約書は後々、作業の遅れた場合などに有効に活用できた。また、契約書には、トラジャ側の代表である技術部門のサロンガロ氏の署名も入れた。これは、トラジャ側にとって、様々な作業過程の問題を相談する公的人物として信頼されたという点で、有効的だった。

## 第2章 国際援助現場の難しさ

ここでは、修復対象物件の交渉時での援助資金をめぐる双方の言い分を明らかにする。また、交渉時に話し合っていたにもかかわらず、作業が始まってからの予期せぬ問題を叙述し、現場の難しさを提示する。

### 2-1 援助される側の言い分

トラジャのような伝統社会では、儀式は欠かせない。儀式はファミリーだけで執り行うものではなく、村人参加で行われる。従って、ファミリーの威信をかけて行う傾向がある。家屋の祝祭は、ランブ・トゥカと呼ばれ正式な儀式である。つまり、トラジャ族の文化の一部ということになる。交渉時に出てくるのはまず、この儀式の費用である。そして、この儀式費用まで援助資金に含めて欲しいという要求である。しかし、儀式の費用に上限はない。修復物件の見積もりはできても、儀式の費用見積もりは出来ない。ここに異文化理解の難しさがある<sup>10)</sup>。

次の問題は、トラジャでは葬式に関する儀式

がたくさんある。この期間はいっさい仕事をしないという主張である。特に、バルップ地域は8月の乾期に葬儀儀礼が集中する。この仕事に最適の期間に仕事をしないというのだ。

また、キリスト教徒が多いトラジャでは、日曜日は教会に行くために仕事はしたくないというのだ。これは修復期間が延びることを意味するものである。

トラジャでは、建物の修復に使用する部材は、建物を解体した時に床下に保管しておく習慣がある。この部材を次の修復時に使用する。家屋で使えない場合は、豚小屋、水田の休憩小屋、薪などと木材を捨てることはない。このように使用可能な部材を利用して修復する技術をもっている。しかし、出来ることなら新しい部材を使用したいので、必要以上に新材に交換する傾向がある。

### 2-2 援助する側の対応

まず、トラジャの文化については、全面的に理解するが、儀式については、ファミリーの範疇であり、援助資金にこれを見積もることはしない旨説得した。援助はされる側にとっても、されるということだけではなく協力して文化財を修復し、保存するという認識をもって欲しいからである。これが難しい問題であった。しかし、これをトラジャ側に理解してもらわないと、今後の修復は継続できないことになる。つまり、日本とトラジャの協力が主であり、援助されるだけではないということを主張しつづけたのである。これは、数年かけて理解されるようになった。

特別な儀式への参加による作業中止や、教会礼拝のため日曜日は休業とすることなどは承認した。

建物の古材を使用して修復することで、文化財修復の意味がある。このことについて造詣が深い、サロンガロ氏を中心にして、技術指導を行うことで解決した。

これらの双方の理解の違いは、契約書に明確

に盛り込んで作成する必要がある。儀式のことなど細かい点もきちんと盛り込んで作成することである。とにかく、何度でも話し合い、双方の文化の理解などを行い、どんな小さなことでも話し合って双方で取り決めているということが重要である。つまり主体は援助する側ではなく、援助される側でもなく、双方が協力して国際援助は行われるという相互認識を、作り上げることが重要である。

### 2—3 援助する側の言い分

援助する側に起こってきた「地域性」について述べる。日本の一地方が、国際交流を始めたものの、途中で頓挫した話はよくある。この原因を考えない限り、地方の国際交流は出来ないことになる。このことについて、個人的に追及する意味はない。一地方の活動としての評価をしたうえで、原因追及をし、普遍的理由を明確にしたいと考える。

トンコナン修復委員会は、資金調達を全国規模で展開した。テレホンカードについては、小額の援助として、全国に広がった。資金は、短期間で、当初の予定金額に達した。あらゆることは修復委員会に報告され討議された。事前調査、その結果、修復物件の決定など委員会の了解をすべて受けた。

資金が集まり、活動が出来るようになった時、錯誤が生じたのである。前沢町で始まった活動で、前沢町民が資金を拠出し、この活動を行っているのだという錯覚であった。地元のマスコミは、前沢町、町民、牛の博物館の支援活動として取り上げたのである。ここには全国に広がった NGO 活動の視点が抜け落ちていた。地元のめんこい TV は、ドキュメンタリーをとり始めた。このような背景から、地元ヒーローがでるようになり、地元の活動として強調され流布されていったのである<sup>11)</sup>。

またトラジャでの建物のランブ・トゥカ（日本では建て前）を、建物の屋根に登って餅を撒くというような前沢のやり方でやると主張し始

めたのである<sup>12)</sup>。自分達が援助資金を出しているのだから、こちらの要求どうりトラジャ側は従うべきだという意見まで出始めた。

一方、事前調査を十分に行い、修復物件の選定に入っているにもかかわらず、牛の博物館開館作業のために来日したトラジャ人の住むケテケス村を修復するという希望が強くなったのである。ここは、近いうちに世界文化遺産に登録されるという情報は周知されていた。つまり、前沢のアピールのための修復物件選びが始まったのである。こうして組織の一部は崩壊し始めた。

### 2—4 結果と継続

一番の問題点は、全国のたくさんの人たちからの支援があって成立している視点が完全に抜け落ちた点である。また、当初、町の事業として行わないという結論から NGO を立ち上げたことも抜け落ちてしまった。むしろ、前沢という地域性を強調することにこの活動を生かそうとした。そのため地域ばかりが前面にでて、活動の基本を失いかけたのだった。マスコミも拍車をかけた。牛の博物館の新しい取り組みとしての評価はするが、スタッフの「公務員として立場」の限度があった。

しかしながら、何度も討議をかさね、前沢方式のランブ・トゥカを行うことなどは文化の押し付けであり、行わないということにした。そして、当初の予定どおり、2000年でこの活動は終了することを決めた。ドキュメンタリーは中止になり、一部の人はこの活動から抜けていった。また、ケテケスの修復希望については、建物の修復を行うのではなく、修復の一部金として寄付することになった<sup>13)</sup>。

## 第3章 国際援助の可能性

文化財保存をとおした国際援助は可能である。しかし、本稿で論及したような「地域性」を強調するような援助方法は、有効的ではない。ここでの地域性とは、地域の習慣や文化を

相手側に押し付けることである。また、地域住民の素朴な交流希望への熱意から出発しても、その過程での再度の確認、理解、学習などを積み重ねない限り、援助する側の強制に転換してしまう。注意すべきことは、ここに介在するのは具体的な援助資金という絶対的力関係＝資金の優位性である。この優位性のゆえに、当初の試みも熱意も崩壊することになる。

また、国際援助、国際交流は派手なものではない。一つ一つの事務手続きの詰めと作成、確認、報告の積み重ねである。これを抜きに国際援助を考えることは間違いである。この事務的手続きなどの観点から考えれば、地方の NGO または地方行政主導の活動は、国と国の援助に関する諸手続きに比べれば、より簡単で、スムーズに行えるはずである。ただし、ここでも情報公開については、援助する側もされる側も双方とも真摯に提供し、話し合いを何度でも繰り返し、双方の合意をえる努力をおしまないことである。

本事業の経験からいうならば、当初国を飛び越えて国際援助の可能性が芽生えかけていたが、「地域性」が強調されたことで、通常の国際交流になってしまったのである。文化財保存という専門性を要し、見積もり金額も大きく、生活と文化に密着した文化理解を必要とする難しい国際援助を行おうとしたことは、大いに評価したい<sup>14)</sup>。しかし、「地域性」がもたらした結果は、当初計画のスケールより小さいものとなった。結論は、地域の力量にあわせた国際援助は何が可能かを十分に考え、力量以上のことは行わないということである。その後、国際援助をどう発展させるかは、ここまでの結果次第である。まずは、この順序で取り組むことが賢明である。この失敗の経験を、今後、地域の国際援助の可能性として活用、発展させたいと考える<sup>15)</sup>。

#### 注

1) 92年度に行った修復事業は、トンコナンと多少

形態の違うバヌア・タンベンだった。報告は参考文献1に詳しい。

- 2) 95年に就任したタルシス・コドラット前知事は非常に協力的であった。
- 3) 板材は、ウルという木材を使用する。その他、石材もある。
- 4) この地域は、ココア生産ができる。スハルト失脚後、買占めがなくなり農民は自由に市場にだせるようになり、現在は、ココア生産に変換するため山林の伐採が目立つ。
- 5) 年代の古いトンコナンは、屋根のそりも緩く、彫刻も色彩していない。
- 6) サダン・トラジャ展では、トラジャに関する資料収集、民具の買い付け、舞踊団の招聘、展示などをコーディネートした。
- 7) 町長が交代したことも多少影響した。トラジャ人招聘時から消極的対応だった。
- 8) 温泉を掘るほうが大事だという意見もでた。
- 9) この場合、米倉である。来日して建築した総責任者はサロンガロ氏である。
- 10) トラジャ社会とその変容については、長崎国際大学論叢に発表した。参考文献3に詳しい。
- 11) めんこい TV は、「カンナ片手に国際交流」として撮影を始めた。中止後に、他のタイトルで他地域のトキュメンタリーを撮影した。
- 12) その他、羽織はかまで織をたてるとかである。トラジャの文化との接点が無いので反対した。この活動を言い出したのは誰かというところまで話は進んだ。
- 13) ケテケス村は、ヤヤサンという互助組合のもとで、自主的に修復を行っている。世界遺産候補地の中に立つ一つのトンコナンに一部金として寄付した。
- 14) 本活動については『トンコナン修復支援活動の記録』として報告書にまとめた。
- 15) 現在、前沢町民有志があつまって、ケテケス村近郊に立つ、工業高校の学費援助に取り組んでいる。これは、小額であるが、学生の顔が見え、お礼の手紙や彫刻などの交換もあり、参加者が増えている。このようなものから始めるのも良策である。

#### 参考文献

- 1) 財文化財建造物保存技術協会 (1997) 『バヌア・タンベン保存修理工事報告書』
- 2) 財文化財建造物保存技術協会 (1993) 『インド

ネシア・トラジャの伝統的家屋修理報告概報』

- 3) 細田亜津子 (2001) 「伝統社会の適応と社会変容」『長崎国際大学論叢』第1巻 (創刊号), 261-271頁.

- 4) トンコナン修復支援活動委員会 (2001) 『トンコナン修復支援活動の記録』